

第二章 匂兵部卿の物語 宮の御方に執心

[第一段 按察使大納言、匂宮に和歌を贈る]

*若君(其処へ若君が)、内裏へ参らむと(参内する挨拶を殿になさろうと)、*宿直姿にて参りたまへる(略装の殿居姿でお見えなさいます)、わざとuringはしきみづらよりも(正装でしっかりと整えた結髪姿よりも)、いとをかしく見えて(お下げ髪姿にとても親愛を感じて)、いみじううつくしと思したり(藤殿は若君を非常に可愛いとお思いになりました)。 *「わかぎみ」は注に<紅梅大納言と真木柱の子、宮の御方の異父弟。>とある。西姫とは同腹の姉弟となるので、この部屋には親しく若君が入りしていたのかも知れない。それにしても、この文から章立てを変えてある構成校訂だが、上文とは同じ場面のままのようで、こうした観劇姿勢は疑問だ。当章の第二段で舞台が御所に移るようなので、そこから章を変えるか、入内の前と後という話の趣きで章立てを組むなら、一章三段から章を変えてしまう方が無理が無い、かと思う。 *「とのみすがた」は正装よりは簡略化した装束なのだろうが、若君は元服前の童殿上らしく、「風俗博物館」サイトの「日本服飾史資料」編の「平安時代」の「半尻をつけた公家童子」の画像を参照する他に拠り所がなく、私にはとても実際の姿は覚束無い。

*麗景殿に(麗景殿に住まいを許された皇太子妃の長女に付き添っている奥方宛てに)、御ことづけ聞こえたまふ(藤殿は若君に御伝言を託し申しなさいます)。 *「れいけいでん」は注に<紅梅大納言の大君。>とある。「麗景殿」は<平安京内裏十七殿の一。宣耀殿の南にあり、西方の弘徽殿(こきでん)と対する。皇后・中宮・女御などの居所。>と大辞泉にある。麗景殿女御は弘徽殿女御に次ぐ高位の帝妃であることが多かったようだ。桐壺帝の麗景殿女御は不幸にも子宝に恵まれなかったらしいが花散里の姉御であった。朱雀帝の麗景殿女御は冷泉帝代の東宮とは即ち今上帝の母御だったが、東宮の即位前に没した。冷泉帝代の麗景殿女御は不明だが、玉鬘が一时尚侍として入内していた時には麗景殿を宛がわれていたかと思う。玉鬘は時の藤原大臣の妾腹娘だったが、六条院の姫格で厚遇されていたわけだ。そして今は、東宮妃として藤大納言の長女が麗景殿を宛がわれているらしい。東宮は何処に住んでいるのだろう。また、今上帝の在位は25年ほどとなっていて、即位が20歳の時で、この年で45歳をになるかと思うが、当時6歳だった東宮もこの年で31歳になっている計算となり、冷泉院が退位した時の28歳という年齢を超えていて、冷泉帝の退位が若すぎる嫌いはあるが、若年の皇太子とは違う生活様式を持っていそうな気がするし、だとすると、後宮での帝妃と皇太子妃との社交が複雑なのではないかと、全く余計な詮索さえ出来そう。因みに、存命の筈だが、冷泉院は53歳、冷泉院の弘徽殿女御とは即ち故大臣の女御とは即ち藤大納言の同腹妹御54歳、秋好中宮62歳、となっている勘定だ。が、それにしても、このような重要な事情説明が全く無いままに、此処に行き成り「麗景殿に」と語られる唐突さは、今に始まった事では無いが、とても馴染めるものではない。しかも、この「麗景殿に」は<その長女に>でもなく<そこに付き添っている奥方に>という意味らしく、省語にも程が有ると呆れる筆致だ。

「譲りきこえて(東宮妃の御世話はお任せ申しますので、宜しく願います)、今宵もえ参るまじく(今夜も私は参内申せないほど)、悩ましく(体調が優れませんので)、など聞こえよ(などとお伝え申せ)」とのたまひて(と藤殿は若君に仰って)、

「笛すこし仕うまつれ(笛を少し吹いてみなさい)。ともすれば(もしかすると今夜あたりは)、

御前の御遊びに召し出でらる(帝の御前での器楽演奏会にお呼び出しが掛かるかもしれない)、かたはらいたしや(畏れ多い事だ)。まだいと若き笛を(まだひどく拙い笛なので)

とうち笑みて(と微笑して)、*双調吹かせたまふ(小曲を吹かせなさいます)。*「さうでう」と言えば、当時の読者は凡その音色や曲調が想起出来たのかも知れない。が、私には何も聞こえない。「笛」というのは<横笛>で、その日の楽器の鳴りや奏者の状態を調べる為なら、素音が分かり易い単純な小曲を吹いたような気はするが、ユー・チューブで竜笛の双調の曲を聴いても、この場面の若君の笛の音をそこら辺に当たりをつける素地が私には無い。

いとをかしう吹いたまへば(若君がとても上手にお吹きなさると)、

「けしうはあらずなりゆくは(聞き苦しいほどでもなく成って来たのは)、このわたりにて(こちらのお部屋で)、おのづから物に*合はするけなり(日頃から他の楽器に合わせているお蔭なのだろう)。なほ(今も)、*掻き合はせさせたまへ(少し弾き合せてみて下さい)」 *「あはする」は「合はす(合奏する)」の連体詞。「け」は<「気」=気配=事情>や<「異」=珍しい事情>あたりだろう。殿は東姫には敬語だが、若君には敬語遣いが少ない。血縁関係よりは姫が成人していて若君が子供だという事情が大きいようにも思うが、姫と弟君とは相当な年の差がある、と改めて感じる。 *「掻き合はす」は<弦楽器を他の楽器と合奏する>という語用の他に<軽く弾き合せてみる>という語用がある、と古語辞典にある。

と責めきこえたまへば(と殿が東姫に催促申しなさるので)、苦しと思したるけしきながら(恥ずかしさで困っていらっしやる様子ながらも)、爪弾きにいとよく合はせて(琵琶を爪弾きで若君の笛に調子を合わせて)、ただすこし掻き鳴らいたまふ(少しだけ掻き鳴らしなさいます)。

*皮笛(口笛を若君の横笛に合わせて)、*ふつつかに馴れたる声して(しっかりした吹き慣れた音で鳴らして)、この東のつまに(この寝殿の東端の部屋の前の)、軒近き紅梅の(軒に近く咲く紅梅が)、いとおもしろく匂ひたるを見たまひて(とても風情豊かに咲き匂っているのを藤殿は御覧になって)、 *「かはぶえ」は(「唇の皮で吹く笛」の意という)という説明で<口笛>のこと、と古語辞典にある。この場面では、藤殿は若君の笛に合わせて興じた、ということなのだろう。 *「ふつつか」は<太い>という意味もあるが、口笛の太い音と言うと低音っぽい感じで、確かに口笛にも音程はあるだろうが、それだけに低音だけを言うのも変で、此处では安定している<しっかりした音色>のことなのだろう。

「御前の花(此处の花は)、心ばへありて見ゆめり(実に見事に見えます)。*兵部卿宮(梅好きの兵部卿が)、内裏におはすなり(今日は御所にいらっしやいます)。一枝折りて参れ(この紅梅を一枝折って持って行って差し上げなさい)。*知る人ぞ知る(気持はお分かり頂けようから)」とて(と若君に言って)、 *「兵部卿宮」は匂兵部卿巻二章四段に「御前の前裁にも春は梅の花園を眺めたまひ」とあって、梅好きとして知られていたらしい。 *「知る人ぞ知る」は注に<『源氏釈』は「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」(古今集春上、三八、紀友則)を指摘。>とある。「色をも香をも知る人ぞ知る」は既に肉体関係を持って知り合った者同士を意味する。だから「君ならで誰にか見せむ」は<変わらぬ愛を示したい>だ。が、此处では藤殿が匂宮に若君を使者に立てて紅梅を贈る、ということだから、匂宮には貴親王と我が娘との縁談を望む父親の気持を知らせたい、という意味での「知る人ぞ知る」だから<分かってくれる筈>という言い方なのだろう。

それを若君が何処まで分かるのかは微妙だが、縁談話だということぐらいは子供とは言え殿上の大人社会を垣間見ていれば察しは付くだろう。いや、子供に縁談の何が分かるのかはやはり微妙だが、祝い言、目出度い事、ぐらいの雰囲気は分かるだろう。

「あはれ(ああ思い出せば)、光る源氏(故六条院が光る源氏)、といはゆる御盛りの大將などにおはせしころ(と言われていた若い盛りの大將などでいらっしやった頃)、*童にて(私が殿上童になり立てで)、*かやうにてまじらひ馴れきこえしこそ(ちょうど今の其方が匂宮に親しくして頂いているように近付き申し上げていたことが)、世とともに恋しうはべれ(年を追うほどに懐かしい)。*「わらはにて」は賢木卷六章三段の「中將の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり」をそのまま想起して良いのだろう。当時光君は、波乱前夜ではあったが大將の地位には就いていた。*「かやうにて」はくこの日の殿居で藤原の若君が匂宮に「まじらひ馴れきこえ」るように>という意味だから、若君は45年前の藤大納言と同じように殿上間もない8、9歳の童子だったのかもしれない。一応、9歳(※)と見て置きたい。となると、故兵部卿宮は10年以上前に逝去していて、且つ東姫への遺贈分が多かった(一章二段)とすれば、死別時点で東姫は成人していた可能性が高い。裳着は12、3歳頃と古語辞典にあり、東姫は小さく見ても23歳以上ではありそうだ。故兵部卿宮と真木柱との結婚は29年前の事なので、東姫の年齢は23~29歳に絞られて来た、かに見える。一応23歳(※)と見て置きたい。というか、さっさと明示して欲しい。年齢が分からないと、妙な読み間違いをしそうで気分が落ち着かない。何しろ私は当時の実情を全く知らないのだから、当時の読者のように周知していない。※若君9歳、東姫23歳、と前回は推量していたが、竹河巻読後の今は真木柱の再婚が11年前と見ているので(とは言えも推量だが)、それぞれ2歳加えて、若君11歳、東姫25歳、と見て置く。(2013.2.7.)

この宮たちを(故六条院の御孫でいらっしやる今の親王たちを)、世人も、いとことに思ひきこえ(世の人もそれは格別に思い申し上げ)、げに人にめでられむとなりたまへる御ありさまなれど(実際に讃えられるに相応しい御様子だが)、*端が端にもおぼえたまはぬは(故院の超然さの片鱗すらお持ちでないとお見えでいらっしやるのは)、なほたぐひあらじと思ひきこえし*心のなしにやありけむ(どうしても故院が比類の美しさでいらっしやったと思ひ申した若い日の強烈な印象の所為なのだろう)。*「端が端にもおぼえたまはぬ」はく足元にも及び付かないでいらっしやる>みたいな言い方に聞こえるが、そういう物言いは親王に対して不遜に過ぎないか。藤原撰関家は実質で王家の身内なので、気楽な日常会話として飾らない言い方が出来たのか。その辺の感性が掴めず、言い換えが難しい。*「心のなし」はく思い做し。気のせい>と古語辞典にある。「思ひきこえし」にく強烈な印象>と補語する。

*おほかたにて(私などが部外者として)、思ひ出でたてまつるに(故院を思い出し申し上げるにも)、胸あく世なく悲しきを(尽きる事無く悲しいのに)、*気近き人の後れたてまつりて(御血筋を継ぐ御子孫が故院に先立たれ申して)、*生きめぐらふは(生き長らえているというのは)、*おぼろけの命長さなりかし(さぞつらい日々が続いているのだろう)、とこそおぼえはべれ(と思ひ遣られます)」*「おほかたにて」はく世間一般に於いて=傍目には>という言い方で、藤殿は自分の立場を卑下した一種の謙遜表現をしている。藤大納言は光君とは親戚だ。藤殿の叔母の婿が光君だ。藤殿の父方の祖母大宮は源殿の母方の祖母であり、その大宮は光君の叔母宮だった。光君の出自は王家だが、没した時の身分は臣下であり、公式には藤殿は絶対服従の態を取る必要は無い。が、個人的に人を敬うのは自由だ。藤殿は光君の超絶性を実際に目の当たりにした人の一人、ではあるのだろう。*「気近き人」は光君に近親血縁の「この宮たち」であり、特にく匂

宮>のこと、なのだろう。 *「生き廻る」は<生き長らえる>と大辞泉にある。「ふ」は継続状態を示す助動詞。 *「おぼろけ」は難語だ。此处では<思いも寄らない>くらいの語感だろうか。「おぼろけの命長さなりかし」は<想像を絶する悲しい日が続いてるのだろう→さぞつらい日々なのだろう>という言い方で読まないでと文意が通らないように見える。が、「生きめぐらふはおぼろけの命長さなりかし」は<生き残っても意味が無い=無駄に生き続けている>ようにも取れるような言い方に見えて、必ずや何か下敷きになる逸話や古歌がこの言い方にはある、ように思えるが、何の注釈も無い。是も私の勝手な仮解釈のひとつ、ということだ。

など(などとも)、聞こえ出でたまひて(話し出しなさって)、ものあはれにすごく思ひめぐらししをれたまふ(感傷に耽って萎れなさいます)。ついでに忍びがたきにや(遂に藤殿は感極まっただか)、花折らせて(下僕に紅梅の枝を折らせて)、急ぎ参らせたまふ(若君にそれを持たせて、直ぐに参内させ申しなさいます)。

「いかがはせむ(故人を偲んでも生き返るものでもない)。昔の恋しき御形見には(懐かしい故人の御形見には)、この宮ばかり*こそは(この兵部卿宮こそが、いらっしゃるではないか)。 *「こそは」は下に<あめれ>などが省かれている、のだろう。

仏の隠れたまひけむ御名残には(お釈迦様がお亡くなりになった後の御説法は)、*阿難が光放ちけむを(弟子の阿難陀がその光明を世に授けたというが)、二度出でたまへるかと思ふさかしき聖のありけるを(そのように釈迦に適う者が二度までも現れなさったかという賢聖がいたのだから)、闇に惑ふはるけ所に(故院を失ったこの世の闇の惑いを晴らす頼りに)、聞こえをかきむかし(この宮に良縁をお頼み申してみるとするか)」とて(と言って藤殿は)、 *「阿難(あなん)」は「阿難陀(あなんだ)」のことで<釈迦の十大弟子の一人。師の説法を最も多く聞き、多聞第一とよばれた。記憶力にすぐれ、経典の第一結集(けつじゅう)の際に多くの経説を復唱したという。阿難。 >と大辞泉にある。

「心ありて風の匂はす園の梅に、まづ鶯の訪はずやあるべき」(和歌 43-01)

「春風匂うこの梅の、花見にお出でなさいませ」(意識 43-01)

*注に<大納言の詠歌。『完訳』は「「梅」は大納言の中の君、「鶯」は匂宮。二人の縁組を望む歌」と注す。『河海抄』は「あらたまの年行きかへり春立たばまづ我が家戸に鶯は鳴け」(万葉集二十、大伴家持)を指摘。『休聞抄』は「花の香を風の便りにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにやせむ」(古今集春上、一三、紀友則)を指摘。>とある。藤殿はこの歌に紅梅の花枝を添えて匂宮へ贈っている。そして、その紅梅には「知る人ぞ知る」という紀友則の古今集 38 番の歌の一節を若君から言伝させた上での、この贈歌なのだから、この歌詠みが同じ紀友則の古今集 13 番の歌を下敷きにしてある事は、殿が宮に対して文化人の常識として明示している事になる。即ち、この紅梅の花をお贈りするの、お見合いを兼ねた当家の梅の花見へのお誘いです、と若君に言わせた事になる。「心ありて」は<季節を知って=春が来て>という常套句だろうが、複意は<紀友則の古今集 38 番の歌心を持って>であり、それは即ち<縁談話として>という意味だ。「風の匂はす園の」は<年頃の娘が居る当家の>。「梅」は<大納言の中の君>と注にあるが、また藤殿はその心算のようで、以前から具体的な話が持ち上がっていたのなら、そういうことが客観的に自明の事になるのかも知れないが、物語を此处まで読んだ限りでは、この「梅」の表示対象から東姫を排除する根拠は、特に匂宮にとっては、見当たらない。「まづ鶯の訪はずやあるべき」は古今集 13 番を踏まえた冗句で<この便りを見て、直

ぐに来ないなんてことは無いよね>という言い方だが、招待状としての意味は<是非お出掛け下さい>だろう。

と(という歌を)、*紅の紙に若やぎ書きて(赤い薄紙に冗談交じりに若やいで書いて)、この君の*懐紙に取りませ(若君の懐紙に包んで)、押したたみて出だしたてたまふを(折り畳んで送り出しなざるのを)、幼き心に(若君は無邪気に)、いと馴れきこえまほしと思へば(匂宮に早くお会い申したいと思って)、急ぎ参りたまひぬ(急いで参内なさいます)。*「くれなゐのかみ」は紅梅に合わせたものか。「紅の薄様」は<紅色の薄手の鳥の子紙。>と大辞泉にある。*「ふところがみ」はくたたんで懐に入れておく紙。ちり紙にしたり、詩歌などを書いたりする。畳紙(たとうがみ)。かいし。>と大辞泉にある。

[第二段 匂宮、若君と語る]

中宮の*上の御局より(若君が参内なされると匂宮は、母である中宮の昼のご休憩室から)、御宿直所に出でたまふほどなり(御自分の殿居部屋にお帰りになるところなのでした)。殿上人あまた御送りに参る中に(高官たちが多く宮のお供に参じる中に)、*見つけたまひて(宮は藤君を見つけ出しなさって)、*「うへのみつぼね」は<后・女御などが参上の時に休息されるため、天皇の御居間近くに設けられた小部屋。>と古語辞典にある。*「見つけたまひて」は注に<匂宮が若君を。>とある。

「昨日は、などいと疾くはまかでにし(昨日はどうして早く帰ってしまったのだ)。いつ参りつるぞ(今日は何時参ったのか)」などのたまふ(と仰います)。

「疾くまかではべりにし悔しさに(昨日は宮様がいらっしゃると知らずに、早く帰ってしまいましたのが残念で)、まだ内裏におはしますと人の申しつれば(今日はまだ宮様が御所にいらっしゃると人が申しましたので)、急ぎ参りつるや(急いで参内いたしました)」と(と藤原の若君は)、幼げなるものから(子供らしい言い方ながらも)、馴れきこゆ(宮様に親しく申し上げます)。

「内裏ならで(御所ではなく)、心やすき所にも(気楽な二条院にも)、時々は遊べかし(時々遊びに来なさい)。若き人どもの、そこはかたなく集まる所ぞ(若者が誰と無く集って賑やかだぞ)」とのたまふ(と匂宮は仰います)。

この君召し放ちて語らひたまへば(宮がこの若君を部屋で遊ばせて話していらっしゃるので)、人びとは(宮に取り入ろうと思っていた高官たちは)、近うも参らず(近寄り難く)、まかで散りなどして(退散して)、しめやかになりぬれば(静かになったので)、

「*春宮には(東宮には)、暇すこし許されためりな(出仕の休暇を少し許されたらしいね)。いとしげう思しまとはすめりしを(とても頻繁に君を側へお呼び出しなさっていたようだが)、*時取られて人悪ろかめり(誰かに座を取られて立場が無いんじゃないか)」とのたまへば(と宮が仰ると)、*「春宮」には大納言家の長女が入内している。若君は皇太子の義理の弟だ。真木柱の母君も皇太子妃に仕えて春宮の側近くに居たのだろう。で、若君は御所では専ら春宮に入り浸る、のだろう。因みに、春宮 31 歳、姉の大君 18 歳、真木柱母君 46 歳、父藤原殿 54 歳、といったところ。*「時取られて」は春宮が大君に入れ込んでいる、ということだろうか。別の童殿上のことだろうか。分からない。

「まつはさせたまひしこそ苦しかりしか(お呼び出しが多すぎて大変でした)。御前にはしも(あなた様の御用でしたら)」

と(と藤君はさすがに匂宮が相手なら苦は無かったなどとは東宮への不満になることは口に出来ず)、聞こえさしてみれば(それ以上は言い差して止めたが)、

「我をば(私の相手なら大変じゃないというのは)、人げなしと*思ひ離れたるとな(位の無い王族など大したものじゃないと差別しているな)。ことわりなり(実際そうだ)。されど*やすからずこそ(が、辛い立場だ)。古めかしき同じ筋にて(古くさい同じ皇族血筋で)、東と聞こゆるは(東姫と申し上げる方とは)、あひ思ひたまひてむやと(慰め合って頂けるんじゃないかと思うので)、忍びて語らひきこえよ(そっと私の事をお話し申してくれ)」 *「思ひ離る」は<関心がなくなる。疎んじる。>などらしいが、此处では<差別する←軽視する>みたいに聞こえる。 *「やすからず」は<心が穏やかではない>と古語辞典にある。此处では、下の「あひ思ひたまひてむや(慰め合って頂けませんか)」に掛かる洒落語用だから<情けない立場だ>くらいの言い方なのだろう。

などのたまふついでに(などと匂宮が仰る時を捉えて)、この花をたてまつれば(若君が紅梅の花を父大納言の言伝と共に差し上げると)、うち笑みて(宮は微笑んで)、

「*怨みてのちならましかば(恨み言を言う前に返事が来るとは、驚いたなあ)」 *この言い回しは、注に<匂宮の心。『異本紫明抄』は「恨みての 後さへ人の つらからば いかにいひてか ねをもなかまし」(拾遺集恋五、九八五、読人しらず)を引歌として指摘。>とある。引歌の歌筋は此处の言い回しとは別物に思えるが、「うらみ」が<つれない恋人への不満>を意味することは共通していそう。匂宮が言う「うらみ」は「やすからず」に居る者同士の自分と東姫が、今は親しく出来ていない、という不満なのだろう。で、その橋渡しを若宮に頼んだ心算だったが、その言伝が先方に届く前に、先方から<受諾回答>に等しい紅梅が贈られて来た、という場面。不満を言伝で貰った後なら(怨みて後なら)この返事は有り得るが(座す、ましかば)、このタイミング(などのたまふついでに)とは驚いた、という台詞なのだろう。

とて(とってその紅梅の枝花を)、うちも置かず御覧ず(手に持ったまま御覧になります)。枝のさま、花房、色も香も世の常ならず(枝振りも花付きも色も香も格別です)。

「*園に匂へる紅の(庭に色付く紅梅は)、色に取られて(色に生気を取られて)、香なむ(香りの方は)、白き梅には劣るといふめるを(白い梅に劣るといふようだが)、いとかしこく(この枝花は実に優れて)、とり並べても咲きけるかな(どちらも並び立って咲いているものだ)」 *「園に匂へる紅の」は注に<以下「咲きけるかな」まで、匂宮の詞。『異本紫明抄』は「紅に色をばかへて梅の花香にぞことごと匂はざりける」(後撰集春上、四四、躬恒)。『源注拾遺』は「梅の花香はことごと匂はねど薄く濃くこそ色は咲きけれ」(後撰集春上、五四、清原元輔)を引歌として指摘する。>とある。「その」は「其野」で<当該地>が原義だろうか。特にそうした説明は目にしないが、此处では<庭、庭園>と読んで差し支えないだろう。「匂へる紅」の「にほふ」は「くれなゐ」と色を示しているのだから<香る>ではなく<色付く、彩る>だ。

とて(といて)、御心とどめたまふ花なれば(お気に召した花なので)、かひありて(大納言が送りなされた狙い通りに)、もてはやしたまふ(匂宮は紅梅を喜びなさいます)。

[第三段 匂宮、宮の御方を思う]

「今宵は*宿直なめり(今夜は御所で泊まることのようにだね)。やがてこなたにを(じゃあ、此処で寝なさい)」 *「とのみなめり」は注に<匂宮の詞。若君の装束を見ていう。>とある。

と(と匂宮が藤君を)、召し籠めつれば(部屋に留めなされたので)、春宮にもえ参らず(藤君は春宮にも参上出来ません。)、花も恥づかしく思ひぬべく香ばしくて(匂宮は花も恥らうほど香り高く)、気近く臥せたまへるを(側で横になっていらっしゃるのを)、若き心地には(藤君は子供心に)、たぐひなくうれしくなつかしう思ひきこゆ(この上なく嬉しく親しく思い申します)。

「*この花の主人は(この紅梅が示す姫は)、など春宮には移ろひたまはざりし(どうして東宮に入内なさらなかったのかな)」 *この発言文の文意に付いて、注には<匂宮の詞。『集成』は「大納言は、中の君を(私でなく) どうして東宮にさし上げる気におなりでなかったのだろう。「花」は紅梅(中の君)、その「主人(あるじ)」は、大納言と見るべきであろう。『完訳』は「宮の御方はなぜ東宮に参らないのか」と注す。『河海抄』は「春来てぞ人もとひける山里は花こそやどの主人なりけれ」(拾遺集雑春、一〇一五、右衛門督公任)。『孟津抄』は「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主人なしとて春を忘るな」(拾遺集雑春、一〇〇六、菅原道真)「菊の露わかゆばかりに袖濡れて花の主人に千代は譲らむ」(紫式部集)を引歌として指摘。「花」「移ろふ」は縁語。>とある。この時点では、匂宮は「はなのあるじ」を<東姫>の心算で語用している、のだろう。「移ろふ」は<引越す>という自動詞らしいので「あるじ」を藤殿とは読めない、ように思う。と同時に、当然に大納言邸の主人は藤殿であり、庭も庭の梅木の所有者も藤殿なので、此処で言う「主人」という語は<所有者、管理者>ではなく、「この花(紅梅)」が縁談対象を示す<主旨の人>を意味する筈だ。匂宮はこの紅梅の枝花が大納言邸寝殿の「東のつまに軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひたる」(当章一段)ものであった事を藤若君から聞き及んでいた事だろう。そして自分の意中が「東と聞こゆる」(二段)宮筋の姫であることも藤君に告げている。だから、「この花の主人」と言えば<東姫>のことだと藤君にも通じると思い込んだ。が、藤君は父大納言から紅梅の枝花については「わが方ざま」(一章三段)の縁談話を言付かって来ていて、母真木柱からは東姫の縁談話は一切聞いていない。更に今夜は「春宮にもえ参らず」と母や姉に面会も出来ない事が上文でダメ押しされている。藤君にとって「この花の主人」は父から託された西姫の<縁談>を意味するに他ならない。藤君は匂宮の興味が東姫にある事は聞かされた。その事に関する藤君なりの感想はあるのかも知れないが、「この花の主人」が<西姫>である事は変わらない。

「*知らず(知りません)。*心知らむ人になどこそ(大事にしてくれる相手が良いなどと)、聞きはべりしか(父からは聞いておりますが)」 *「知らず」は子供が縁談事情を知らないという限りでは妥当な返事だ。が、匂宮は東姫のことを話題にしている心算なので、若君が今日の大納言から言付かった紅梅事項とは別に、東姫の縁談に付いての母君の意向などを何か聞いていないか、という問い掛けでもあったように見える。その意を汲めば、子供の言葉なので正確な情報など期待しないまでも、東姫の日頃の様子や母君との関係などの何かしらの話が藤君から聞けそうに思う。それが「知らず」という無回答とは、「この花の主人」が藤君にとっては<東姫>ではなく<西姫>を意味していそうだと、匂宮に気付かせたかも知れない。西姫の縁談なら藤大納言の意向が全てなので、藤君の「知らず」という無回答も<自分の予見は無意味だ>という説得力が伝わる気がする。 *「心知る」

はく価値が分かる。学識が高い。情緒を解する。行儀作法が身に付いている。式典様式に詳しい。>などを意味するが、「人に劣らむ宮仕ひよりは、この宮にこそは、よろしからむ女子は見せたてまつらまほしけれ」と一章二段に次女の結婚相手に付いて、地位を競う入内よりも姫に相応しい優れた貴人を藤殿が望んでいるような記事があって、むしろ其を前提に考えるならく価値が分かる＝姫を正妻として大事にする>ような言い方にも見えるが、焦点が絞りきれない分かり難い語だ。

など語りきこゆ(などと藤君は匂宮に応答申します)。「大納言の御心ばへは(大納言の縁談のご意向は)、わが方ざまに思ふべかめれ(実の娘の事に付いてらしい)」と聞き合はせたまへど(と匂宮は藤君の話から思い合わせなさるが)、思ふ心は異にしみぬれば(意中の姫は別の東姫なので)、この返りこと(このお誘いへの返事は)、けざやかにものたまひやらず(晴れやかにはお応えなさいません)。

翌朝(つとめて)、この君のまかづるに(藤君が帰る時に)、なほざりなるやうにて(投げ遣り気味な様子で)、

「花の香に誘はれぬべき身なりせば、風のたよりを過ぐさましやは」(和歌 43-02)

「誘われるほどのウグイスに見合う私じゃありません」(意識 43-02)

*注にく匂宮の大納言の贈歌への返歌。『集成』は「一応卑下して見せた体。贈歌と同じ『古今集』の歌(花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふるべにはやる)による」。『完訳』は「不似合いな自分だからとして断った歌」と注す。>とある。「誘はれぬべき身なりせば」はく私が誘われるに相応しいほどの者なら>で、「風のたよりを過ぐさましやは」はく招待状を見過ごすでしょうか>という反語表現、らしい。

さて(そのように返歌してから)、「なほ今は(もう後は)、*翁どもにさかしらせさせで(親の指図に出しゃ張らせずに)、忍びやかに(こっそりと、私の気持ちを東姫に言伝てくれ)」と(と匂宮は藤君に)、返す返すのたまひて(繰り返し仰るので)、この君も(若君も)、東のをば(西姫よりは東姫の方を)、やむごとなく睦まじう思ひましたり(誇らしくも親しくも以前に増して思うのでした)。*「おきなども」は大納言や真木柱の事を具体的に指す、と言うよりはく親の指図>を言う子供符牒の定句と見て置きたい。

なかなか異方の姫君は(却って腹違いの西姫は)、見えたまひなどして(歳が近い子供同士なので、顔をお見せになったりして)、例の*兄弟のさまなれど(普通の同腹姉弟のような接し方だったが)、*「兄弟」は「はらから」と読みがあるのでく同腹姉弟>を意味する、のだろう。

童心地に(藤君は子供心に)、いと*重りかに*あらまほしうおはする心ばへを(東姫のととても大人びて尊敬できる人柄を)、「*かひあるさまにて見たてまつらばや(それなりの地位にある妃として押し申したいものだ)」と*思ひありくに(と意思廻らすに)、*「おもりか」はく重々しい。落ち着いている。>だが、「わらはごこちに」見る印象なら、この年の離れた同腹姉はく大人びて>いたのだろう。*「あらまほし」はくそうあってほしい理想像のような>みたいな言い方だろうが、是も「わらはごこちに」は理屈抜きでく好

ましい＝理想的な大人＝尊敬できる人>に見えたのだろう。 *「かひあるさま」は<相応しい形>で、「重りかにあらまほしう」地位＝后位および其に準ずる立場、を指すのだろう。 *「思ひありく」は<一つのことを思い続ける。あれこれと思ひめぐらす。>と大辞泉にある。具現化のために計算を重ねるのではなく、漠然と色々な場面を想定して可能性を探る、みたいな意味での思索だろうか。

*春宮の御方の(東宮妃である姉君が)、いとほなやかに*もてなしたまふにつけて(とても華やかに立ち振る舞っていらっしゃるにつけて)、同じこととは思ひながら(同じ姉のことでそれも慶事とは思ひながら)、 *「とうぐうのおおんかた」は注に<紅梅大納言の大君。麗景殿女御。>とある。この人は如何呼称すべきなのだろう。若君目線なら<東宮妃の姉君>だろうが、それは客観的一般性に欠ける。が、此处では若君目線の文なので、それが分かり易い。 *「もてなす」は<事物を客観視して取り扱う>ような概念認識で<作為を持って事を為す>ような語感。此处では<役割を演じる→立ち振る舞う>くらいか。

いと飽かず口惜しければ(年長である東姫の立場がとても不十分で残念な処遇に思えたので)、「この宮をだに(東宮妃は無理でも、せめてその弟宮のこの親王だけでも)、気近くて見たてまつらばや(東姫の婿という身内として拝し申したい)」と*思ひありくに(と思ひ巡らす若君にとって)、うれしき花のついでなり(是は嬉しい花の使者役の機会なのでした)。 *この「思ひありくに」は「思ひありく」の連体形に述語対象を示す格助詞「に」が付いているので<思ひ巡らす若君にとって>という言い方などと現代語文としての文構成規範でこれらの文を整理しようとしてみるわけだが、上文での語用と当文での語用に間合いとしての違いは無い、ようにも見える。

[第四段 按察使大納言と匂宮、和歌を贈答]

これは(藤君が持ち帰った匂宮のこの御返歌は)、昨日の御返りなれば見せたてまつる(昨日の父君のお誘いに対する宮のお返事なので、藤君は藤殿にお見せ申します)。

「*ねたげにもものたまへるかな(折角私が古歌を下敷きに洒落込んだ誘いを、同じ古歌を使った言い回しで断ってくるとは、何とも小憎らしい歌詠みをなさるものだ)。 *「ねたげ」は本当に憎くて不快なのではなく、此方の意図を承知の上で、わざと少し意地悪くその狙いを外して応答する相手の機転を<小憎らしく思う>という遊び心、かと思う。

あまり好きたる方にすすみたまへるを(兵部卿宮はあまりに女遊びが過ぎていらっしゃるのを)、許しきこえずと聞きたまひて(多くの政府高官たちが感心できないと思ひ申しているとお聞きになって)、右の大臣(源右大臣や)、われらが見たてまつるには(藤原一門が目には致し申す所では)、いとものまめやかに(それは真面目ぶって)、御心*をさめたまふこそをかしけれ(猫を被っていらっしゃるのが可笑しい)。 *「納む」は<片付ける→仕舞い込む→目に付かなくさせる>。

*あだ人とせむに(名うての遊び人と言うに)、足らひたまへる御さまを(十分な御行状を)、しひてまめだちたまはむも(無理に堅物ぶりなさるのも)、見所少なくやならまし(面白味に欠けるものだろうに)」 *「あだびと」は「徒人」で<浮気者。移り気な人。>または<風流を解する人。>と大辞泉にある。此处では<遊び人>の語感。

など(などと藤大納言は)、しりうごちて(匂宮の陰口を利いて)、今日も参らせたまふに(今日も若君を参内させなさる時に)、また(再度)、

「本つ香の匂へる君が袖触れば、花もえならぬ名をや散らさむ (和歌 43-03)

「匂うあなたの手ほどきで、花は散る時香り立つ (意識 43-03)

*注にく大納言から匂宮への贈歌。「花」は娘の中君を喩える。『花鳥余情』は「元の香のあるだにあるを梅の花いとど匂ひの遥かなるかな」(兼輔集)を引歌として指摘する。>とある。藤原兼輔(ふちはらのかねすけ)は<(877-933)平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。従三位中納言兼右衛門督。邸が賀茂川の堤近くにあったので堤中納言と呼ばれる。「古今和歌集」以下の勅撰集に五五首入集。著「聖徳太子伝暦」、家集「兼輔集」>と大辞泉にある。藤の中納言か。引歌は梅の花で元の香が引き立つのか、元の香で梅の花が引き立つのか、当歌がこの歌の本歌取りなら、後者が正解になりそうに見える。「袖触る」は思うのではなく実際に物が反応する直接的な語感。もう話は通っているから、後は実際に会って情交するだけだと言う性急な物言い、なのかも知れない。相手を遊び人と知って「花もえならぬ名をや散らさむ」などと娘を売り込むのは、とても素人の出来る芸当では無い。この辺りが当代切つての大芸人なる藤大納言の面目躍如たる演出か。

とすきずきしや(と下世話に過ぎて)。あなかしこ(恐縮です)」

と(と匂宮に贈歌して)、*まめやかに聞こえたまへり(是が本気の縁談だとお知らせ申しなさいました)。*「まめやか」は大辞泉にくまじめなさま。心がこもっているさま。また、注意が行きとどいているさま。>または<本格的なさま。いいかげんでないさま。>また<実用的なさま。>とある。是が歌詠みの趣きを説明するものでないことは明らかだ。この「まめやかに」は今回の<お誘い>自体を対象にした形容語用だろうし、左様に補語する。

まことに言ひなさむと思ふところあるにやと(匂う宮は藤大納言の重ねての贈歌をお読みになって、是は本気の縁談の心算らしいと)、さすがに御心ときめきしたまひて(姫違いではあるものの意中の東姫も同じ大納言家の姫ではあるので、この大納言のお誘いには、そのままでは受け難いながら御心は動かされなさって)、

「花の香を匂はす宿に訪めゆかば、色にめづとや人の咎めむ」(和歌 43-04)

「訪ねてみたい気はするが、誤解があると心配です」(意識 43-04)

*「花」は<中の君>だ。匂宮の意中の相手は東姫だが、藤殿が梅の花に例えているのは<中の君>であり、今や匂宮もその事は分かっていて、今回の贈答歌に於いて「花」と言えば<中の君>を意味することは双方の了解事項だ。その上で、「とめゆかば」という仮定表現を用いた宮の意図は、「とむ(訪む)」気が全く無い訳では無いことを示していて、それが「人の咎めむ」事を懸念するので、「とむ」としても、それが「色にめづ」ことにならないように条件を整えて欲しい、即ち姫違いに気付いて欲しい、と暗示しているのだろう。でなければ、「花の香を匂はす宿に訪めゆかば」

は素直に読むなら、それは当然に「色にめづ」からなのであって、それは決して「人の咎めむ」ような悪事ではなく、普通に慶事である。だから、宮の暗示に藤殿が気付かなければ、何を言っているのか分からない、変にひねくれただけの歌であり、そんな変な歌を宮が反す筈も無いので、殿には疑問が残るに違いない。

など(などと遠慮がちな返歌で)、なほ心とけずいらへたまへるを(まだ用心深くお答えなされるのを)、*心やましと思ひみたまへり(藤殿は変に思っただけに思っていました)。*「心病まし」は<気に入らない。不満だ。>でもあるだろうが、「病む」は<異変がある>や<心配する>でもあるので、此处では<異変を気懸かりに思う=変に思う>くらいの言い方に見える。

北の方まかでたまひて(真木柱奥方が帰宅なさって)、内裏わたりのことのたまふついでに(東宮妃の様子をお話しなされた際に)、

「若君の、一夜、宿直して(若君が先日御所泊まりをして)、*まかり出でたりし匂ひの(その朝に私のところに遣ってきた時の匂いが)、いとをかしかりしを(とても芳しかったのを)、人は*なほと思ひしを(他の者は普通の事と思いましたが)、*宮の、いと思ほし寄りて(春宮がとても良くお気付きなさって)、『兵部卿宮に近づききこえにけり(兵部卿宮の所に行っていたのだな)。うべ(なるほど、それで)、我をば*すさめたり(私を避けたワケだ)』と、けしきとり(と事情を知って)、怨じたまへりしか(怨み言を仰っていました)。*「まかり出づ」は<貴人の前から退出する>と古語辞典にある。が、下文の内容からして是は帰宅ではなく、母君の許に寄ったということらしく、その母君は東宮妃に付き添って東宮に居て、若君は東宮にも接見したようだが、初めから東宮に<参る>という意味でも、この「まかり出づ」が使われているのかも知れない。が、私にはその辺の語感分からない。*「なほ」は「直」で<普通>の意、らしい。*「宮」は<春宮>のことらしい。が、この「宮」に限らず全体に、訳文を読めば、確かにそうらしいと文意をつかめるが、さすがに会話文だけの事はあって、よほど豊かに場面想定が出来ないと全く読めない難文だ。*「すさむ」は「荒む・進む」という自動詞語用が多いかと思うが、此处では<嫌う、避ける>という他動詞らしい。若君が東宮に寄り付かなかったことを嫌味を込めて言う冗句語用なのだろう。

ここに、御消息やありし(此处に兵部卿宮からのお手紙があるんですね)。*さも見えざりしを(若君がその文遣いだったとは知りませんでしたよ)。*「さも」の係助詞「も」は強調意で<まさかそうとは>くらいの言い方なのだろう。で、「そうとは」は<そういう事情とは>で、「そういう事情」とは<若君が殿と兵部卿宮との文遣いをしえたこと>なのだろう。

とのたまへば(と仰ると)、

「さかし(そうなんだ)。梅の花めでたまふ君なれば(兵部卿宮は梅の花が好きなので)、あなたをつまの紅梅(あそこの庭の端の紅梅が)、いと盛りに見えしを(それは盛りに見えたので)、*ただならで(是は睦を交わす良い機会だと)、折りてたてまつれたりしなり(その枝花を折ってお贈り申し上げたのです)。*「ただならず」は<普通ではない、特別だ>で、それ自体に優劣の意は無いが、「いと盛りに見えし」と好機である事が示されているのみならず、その好機も長女の入内に続いての、第三親王に対して「庭の梅が盛りだ」と知らせることは、次女の縁談の持ち掛けであることが奥方には十分に察せられる言い方を藤殿はしている、ように見える。

移り香は(若君に付いた匂宮の移り香は)、げにこそ心ことなれ(さぞ格別だったことだろう)。晴れまじらひ*したまはむ*女などは(晴れて御所仕えなさろうという女君なる者では)、さはえしめぬかな(とてもあれほど芳しくは焚き染められないのかな)。*「したまはむ」は「す」の連用形+「たまふ」の未然形+「む」の連体形で「なさろう」というような>という言い方だろうか。「をんな」は長女のことだろうか。「など」の強調は身内卑下の言い方にも聞こえる。一応、そう取って置く。

源中納言は(源中納言の薫君は)、かうざまに好ましうはたき匂はさで(匂宮のように上手に香を焚き染めるのではなく)、*人柄こそ世になけれ(体質で香るのだから珍しい)。あやしう(不思議なもので)、前の世の契りいかなりける*報いにかと(前世にどんな徳を積んだのかと)、ゆかしきことにこそあれ(知りたくなるほどだ)。*「人柄」は現代語では<気立て、性格>を言うようだが、古語では特徴全般を言うようだ。また、体質や身体 of 具体的な特徴を具体的に細かく分類するような日常語はあまり使われなかったようで、この物語でもその辺の描写に的確な印象は無い。そういう面では現代語の方がよく発達しているように思う。が、論理性に於いては古語は意外に厳密な語用だったりする場合がある、ようにも思う。*「むくい」は因果応報で禍福どちらも有り得るだろうが、「人柄こそ世になけれ」と果報を認めているのだから、その因は善行=徳なのだろう。

*同じ花の名なれど(ただの花の名前だが)、梅は生ひ出でけむ*根こそあはれなれ(梅という香り高い花は咲き出た根が因縁深いのだろう)。この宮などのめでたまふ(匂宮が梅を大事になさるのは)、さることぞかし(尤もだ)。*「おなじ」は<他と同じ=それ自体が特別なものではない=単なる>。*「根こそあはれなれ」は生来の芳香を放つ薫君を香り高い梅の花に準えた物言いのようだ。が、だとしたら、ずいぶん思わせぶりの台詞だ。薫君は六条院光君の末子だが、実は朱雀院の女三の宮と藤原左家長子の故衛門督との間に生まれた不義の子だ。その薫君の「根こそあはれなれ」という台詞を、故衛門督の同腹弟である藤大納言に言わせる、という場面設定は偶然の筈が無い。「この宮などのめでたまふ」も如何にも暗示っぽい。

など(などと藤大納言は)、花によそへても(花の話題に)、まづかけきこえたまふ(直ぐ婿候補の噂を繋げてお話しなさいます)。

[第五段 匂宮、宮の御方に執心]

宮の御方は(宮筋の東姫は)、もの思し知るほどにねびまさりたまへれば(世の中の大体の流れが分かるくらいに成人なさっていたので)、何ごとも見知り(全てを見知って)、聞きとどめたまはぬにはあらねど(記憶なさっている訳ではないが)、「人に見え(誰かと結婚して)、世づきたらむありさまは(子育てをして行くような世間並みの生活は)、さらに(とても自分には有りそうもない)」と思し離れたり(と父宮と死に別れた自分の立場からして、人並みの幸せな暮らしは諦めていらっしやいました)。

世の人も(世の男たちも)、時に寄る心ありてにや(時勢に寄る気持からか)、*さし向ひたる御方々には(大納言家の正統な姫君たちには)、心を尽くし聞こえわび(熱心に結婚を申し込み)、今めかしきこと多かれど(高価な贈り物も多かったが)、こなたは(こちらの東姫は)、よろづにつけ

(どんな季節行事があっても)、ものしめやかに引き入りたまへるを(物静かに引き籠もっていらっしやるのを)、宮は(匂宮は)、*御ふさひの方に聞き伝へたまひて(その身の程を弁えた姿勢が自分のような傍流宮家の妻に相応しいというように東姫の様子を伝え聞きなさって)、深う(本気で)、いかで(何とか結婚したい)、と思ほしなりにけり(と考へなざるようになったのです)。*「さし向ひたる」は<二人が向かい合っている→両親が並び立っている→本家正統の>という言い方らしい。「さし向ひたる御方々」は注に<両親揃っている姫君たちの意。大納言の大君・中君には継母ではあるが二親揃っている。しかし宮の御方は連れ子で片親であるという文脈。『集成』は「現に父君のいらっしやる姫君たちには」。『完訳』は「本妻腹の御方々には」と訳す。>とある。「さし向ひたる」という言い方からは<二親揃っている>という意味に取れそうだが、家制度の実質的な意味としては<血筋の正統性=権勢家との縁組>なのだろう。*「御ふさひの方」は<御夫妻の方=結婚相手>だが、注には<「ふさひ」は、ふさわしい意。>とある。「ふさひ」は動詞「相応ふ(ふさふ、似合う)」の連用名詞で<似合い>。しかし、「似合い」と言っても、其れは匂宮が勝手に自分の価値観で考えたことに過ぎず、客観的評価ではない。その内容を推し量れば、「引っ込み思案」は評価し難いから、身の程を弁えた東姫の<分別と自制心>が傍流宮家に適していると匂宮は評価した、と見て置く。

若君を(匂宮は藤原の若君を)、常にまつはし寄せたまひつつ(いつもまとい付かせて呼び寄せなさっては)、忍びやかに御文あれど(内々に東姫に文遣いさせなざるが)、*大納言の君(夫の大納言殿が)、深く心かけきこえたまひて(匂宮から姫君にお手紙がある事を、非常に喜び申しなさって)、「さも思ひたちてのたまふことあらば(そのうちに正式なお申し込みがありそうだ)」と、けしきとり(と西姫の縁談と早合点して)、心まうけしたまふを見るに(結婚式の気構えをなさっているのを見ると)、いとほしう(気が重く)、*「大納言の君」は<藤原大納言殿>のことだが、これは真木柱奥方の目線で語られる文なので、こういう呼び方になるらしい。注には<『集成』は「夫の大納言は。以下、匂宮の文通のことを知っての北の方(真木柱)の思い。それで「大納言の君」という」と注す。>とある。従う。ただ、妙な構成の文だと思うし、此处で語られる文意が成立するには、藤殿以外は全員が匂宮の手紙が東姫に届けられている事を知っていて、藤殿だけが宮の手紙を西姫宛てだと思っている、という背景事情になるようで、それは本当に有り得るのかという疑問が頭から離れず、とは言え有り勝ちな話だから、この文意自体は分かり易いが、こう言い換えよう、と決するには躊躇があったし、今でも本当に良いのか、とムズガユイ。

「ひき違へて(相手違いで)、かう思ひ寄るべうもあらぬ方にしも(懸想なざるべきではない東姫の方に)、*なげの言の葉を尽くしたまふ(匂宮は心無い口説き文句を言い続けなさっている)、*かひなげなること(無駄なことです)」*「なげの言の葉」は<心のこもらない言葉。無げの言葉。>と大辞泉にある。しかし、匂宮は東姫には本気らしいので、是は真木柱奥方が匂宮を遊び人と見做しての感想なのだろう。*「かひなげなること」と言う真木柱奥方の「いとほし」さは、先ずは匂宮に向けられているように見えるが、其れは同時に愛娘の東姫に対しても向けられるだろうし、勘違いをしている夫にも、勘違いされている西姫にも、無駄な遣っ走りさせられている若君にも、そして気を揉んでいる奥方自身にも向けられる。みたいに読んで置いて良いのだろうか。是は内心文ではなくて発言らしい。多分、全体像の説明が不十分な所為で、難文というより難解な話になっている印象だ。

と、北の方も思し*のたまふ(と真木柱奥方もお考へを遣いの若君に仰います)。*「のたまふ」相手は誰か。「若君を常にまつはし」と語り出された文構成と文意から見て、北の方の話し相手は<若君>と見做す。ただ、下文との繋がりからすると、実際に話すのは若君に対してだが、それが匂宮へ言伝わることまで北の方は意

図していた、とは言えるのかも知れず、若君に<遣いの>を付け足して逃げて置く。

はかなき御返りなどもなければ(東姫からは形だけの挨拶程度の御返事すら無いので)、負けじの御心添ひて(匂う宮は負けん気を起こしなさって)、思ほしやむべくもあらず(懸想のお気持が止むような事ありません)。「はかなし」は<頼り無い。むなしい。>という語だが、時として<場当たりの情痴言、戯言>であったりして、それは最も<情熱的>とも言えそうだが、此处では<甲斐の無い=まともな返事になっていない=型通りの時候挨拶>のこと、かと思う。

「何かは(東姫との結婚に何か不都合はあるだろうか)、人の御ありさま(宮の御身分に)、などかは(何の不足も無い)、さても見たてまつらまほしう(理想の結婚相手のように)、生ひ先遠くなどは見えさせたまふに(将来も安定していらっしゃるし)」など、北の方思ほし寄る時々あれど(などと奥方はお考えになる事が時々あるが)、

いといたう色めきたまひて(匂う宮はそれはもう女好きでいらして)、通ひたまふ忍び所多く(通いなさるお馴染みも多く)、*八の宮の姫君にも(桐壺院の第八親王の姫君にも)、御心ざしの浅からで(御執心で)、いとしげうまうでありきたまふ(たいそう足しげく参上なさっているのです)。*「八の宮の姫君」は注に<宇治八の宮の中君。『新大系』は「桐壺院の第八皇子であることが橋姫巻で紹介される。ここで唐突にも「八の宮の姫君」に匂宮が通うことが記されていることで、当巻の成立・巻序・年立などでさまざまな問題を生む(※)」と注す。>とある。ヘー、ソーナンダ、と思う他は無い解説だが、唐突な話には然程驚かない。基本的に先読みは避けたいが、「八の宮」が「桐壺院の第八皇子」と後で明示されるなら、それは前借しても支障はないかと思う。ただ、桐壺院の末子である第十親王とされる冷泉院が52歳になっている筈で、第八親王なら更に高齢であり、晩年の子としてもその姫君は何歳なのか。匂う宮は24歳くらいだが、光君の子ではなく孫なので、その姫君から見て匂う宮は従姉妹の子だ。普通なら姫宮は相当な高齢が考えられるが、男親が高齢でも女親が若ければ意外と若い姫なのかも知れない。現に、光君の末子とされている薫君は匂う宮よりひとつ年下の23歳というワケだ。それと、第八親王が存命で宮家なら姫君ではなく姫宮ではないのか。唐突さには驚かなくなったが、確かにこの情報不足には馴れようも無い。 ※前回の通読では「当巻の成立・巻序・年立などでさまざまな問題を生む」と言われても何を言っているのかさっぱり分からなかったが、竹河巻読後の今は確かに「さまざまな問題」のいくつかに思い当たる。そして最後まで読まないで「さまざまな問題」を総合的に理解することは出来ないだろうし、解決されない部分が残るだろうことも予測が付く。が同時に、私が竹河巻までを一読しただけでも、この紅梅巻が竹河巻に先行する巻序は無駄に分かり難く、時系列の飛躍に話題の連続性からの説得力もなく、この紅梅巻に語られている話が竹河巻に結ばない徒労感、この巻序の不適切を訴えるに十分であり、シラッと「当巻の成立・巻序・年立などでさまざまな問題を生む」なんて言われちゃ、大迷惑だ。実際、専門家がとっくに片付けて置かなければならない整理しうる部分が放置されている現状に本当に呆れる。まさか、是も官僚主義の弊害なんて言うんじゃないでしょうね。国文学の研究者は今まで一体何をして来たのか。片付くものを片付けて置かなきゃ料理がゆっくり味わえないじゃないか、バカモノ！(2013.2.7.)

頼もしげなき御心の(良人にするには信頼に足り無い匂う宮のお気持の)、あだあだしさなども(浮気性なども)、いとどつつましければ(とても敬遠されて)、まめやかには思ほし絶えたるを(本気の結婚相手には思えないので)、かたじけなきばかりに(王家身分が畏れ多いからという言い方で)、忍びて(内々に)、母君ぞ(母君の真木柱奥方が)、たまさかにさかしらがり聞こえたまふ(時々

は僭越ながらもお断りのお返事を出しなさいます)。

(2013年1月14日、読了)、(2013年2月7日、再読了)